



幸せな夢



柔らかな朝の光が差し込む、ここはルーヴェル騎士団の位階者に与えられる私室。

宵つ張りで朝が苦手な若い上官・カミューを上手に起こすのは、補佐官職を任じられたユリアスの大切な仕事の一つであった。だがそれも、カミューが心を許した友人でもある青騎士団第一部隊で先任中隊長を務めるレオニダスが顔を出した時には免除される。なぜなら、騎士になる以前からの知己である四つ年上の彼をカミューは心から信頼し、無条件に甘えることを自分に許している節があったからだ。

すでにきちんと身支度を終え、騎士隊長の居室で待っていた年上の補佐官は彼に許されている席から立ち上がってレオニダスを迎え入れた。

「おはようございます」

「おはよう、ユリアス。——カミューは？」

「昨晚は遅いお戻りでしたので……」

そういえば赤騎士団第五部隊は、次月の公会議における警備担当を命じられていた。きつと遅い時間まで過去の人員配置などの警備計画を参考に、補佐官や小隊長たちとあれこれ打ち合わせをしていたに違いない。

「だが、そろそろ起こさねばならない時間だろう？」

「ええ、まあ」

共に軍議に参加していたであろうユリアスが、身なりを整えて到着しているからには、起きて当然、起こさねば会議に遅れるやもしれない時間ということで……。それでもまだ年若く、眠い盛りの上官には滅法甘い補佐官は、ギリギリのタイミングまで起こすのを待とうと思っっているようだった。

「俺が行く。着替えは用意されているんだろう？いくらなんでももう起きないと朝の報告会に間に合わない」

「は……」

よろしくお願いします、と頭を下げられ、レオニダスは少し面はゆい表情をして、奥まった寝室の扉を叩いた。

「入るぞ」

表には不寝番の騎士が立つ、隊長クラスの居室の奥にあるゆえか、はたまた部下たちへの信頼のゆえか、カミューの寝室には鍵がかけられることはほとんどない。ノブに手をかけ、かるく下げると、扉は音も立てずにすつと開いた。

「カミュー？」

窓の錠戸はまだ閉じられたままで、部屋の中には隙間から射し込む外の光だけの薄暗い状態だった。レオニダスは

仕方ないな……というように一つ息をつき、まずガラス窓を開け、外の錠戸を開放する。明るい光とともに、ふわつと春先の柔らかな風が流れ込み、部屋の空気を爽やかな朝のそれに交えていく。

次に寝台への足をむけ、つい先日交換されたばかりの覆い布に手をかけて、レオニダスははたと動きを止めた。

「ふふ……」

「——？」

春先から秋の終わりまで使われる薄い紗の帳の中で、毛布にくるまり、いくつも置いてある枕の一つをしっかりと抱え込んだ友人が、なにやらくすくす笑い声をあげていたのだ。

「なんだ？どうかしたのか？」

重なった部分をわけてタッセルでとめながらも、つづく小さな笑い声に疑問がつのる。

「カミュー？」

「ふふふ、くすぐりたいよ」

「——？もう起きろ、朝だぞ」

「ん……、わかった」

ちゃんと受け答えをしているようで、だが友人の特長的な琥珀の瞳はしっかりと閉じられたままだった。薄い桜色

をした唇の端がやさしいカーブを描き、なにやらひどく幸せそうな表情である。

「こら、カミュー？」

肩に手をかけてかるく揺さぶれば、ほんの少し眉を寄せ、くうともふうともつかない声をあげてから、目を開ける。

「……あ？レオン——？」

「あ、じゃないだろう、朝だぞ。起きないと」

「んーうん」

それでも普段に比べれば格段のスピードで、カミューの意識は浮上してきたようだった。

「なにか夢でも見ていたのか？」

「どうして？」

「いや、妙にご機嫌みたいで、くすくす笑っていたから」

「——笑ってた？」

「ああ、ひどく嬉しそうな顔で」

育った最初の環境がそうだからか、私的な場所では体を締めつけるよりはゆったりとした衣服を好むカミューの寝間着は、大きな白いシャツ一枚だ。たつぷりと膝のあたりまでくるほどのそれをふわっと羽織って眠りにつくのだ。

まだ多少ぼんやりとした目をぱちぱちさせながら、いまだ十七歳という史上最年少の騎士隊長はようやくその

ほっそりとした体を起こした。それからうーんと、まるで猫がのびをするように、両手をあげてしなやかな体を伸ばす。ため息を一つつき、彼は傍らに立つ友人の整いすぎて古代の彫像のようとも評される顔を見上げ、にこりとすてきな笑顔をむけた。

「おはよう、レオン」

「ああ、よく眠れたようだな」

「ん……」

もそもそと毛布を足下へ蹴りやりながら起き上がり、乱れた薄茶の髪をかき上げるのを見ながら、レオニダスは聞いてみた。

「一体なんの夢をみていた？」

「夢……ああ、レオンが起こしに来てくれて……」

「来たが？いつものことだろう？」

「でもちよつとちがう。起こしてくれて、ええと……ここに……」

とカミューは自分のベッドのへりをポンポンと叩いた。「今みたいに立ったまま声をかけるんじゃないやなくて、ここに座って、すごくやさしく起こしてくれた」

「……俺、が？優しく、だ？」

「そう」